

他国からみる領土問題

研修4日目は北方領土館を訪れた。館内には島の立体パノラマやパネルが展示されており、2階の展望室からはわずか24kmの距離にある国後島を間近に望むことができる。

そこで私が何より印象的だったのは、外国人観光客に会って話を聞いたことである。白いダウンジャケットを着た彼女は上海出身で、ある日、北方領土はロシアのものだと考える夫(フランス人)と意見が食い違い口論になった。その際彼ら自身が実は問題についてよく知らなかったことに気づき、同館を訪ねたのだという。知識を得て、最終的にフランス人夫は「北方領土とロシアの関係は台湾と中国の関係と似たようなもの」という結論に至ったらしい。日本で北方領土問題について習った日本人の私からすれば、正直それらは全くの別物であるが、彼らの知的好奇心と行動力は見習いたいものである。この出来事で外国からの視点を知り、問題と客観的に向き合う良いきっかけができた。



中央から筆者、観光客

今回の研修に参加した私は、北方四島は歴史的事実からみて、当然日本に返されるべき島々だと知っている。しかし、もし私がロシア人だったら、自信を持って日本に返すべきだと思えるかは分からない。私の見ている世界はまだ小さく、いつでも自信を持って主張できることは決して多くはない。たとえ正しい答えを見つけても、時代や場所の変化で、また別の答えにいきつくこともある。しかし、そんな流動的な状況の中にもひとつだけ確かなものがある。それは「島に帰りたい」と願う元島民の方々の切実な思いだ。78年前に故郷を追われた彼らの苦しみは、今でも心の傷となって深く残っている。きっと私に出来ることは彼らの声を聞き、罪のない人々の幸せのために「答え」を追求し続けることだろう。

一人と人一心のつながり

「決してロシア人が悪いわけじゃない。」これは、北方領土根室研究会として活動している根室高校の生徒や先生、そして元島民の得能宏さんなど、領土返還を強く願う3人から共通して出た言葉である。



得能宏さん(89)

1992年4月、住民同士の相互理解を目的として、日本人と北方領土に住むロシア人がビザの発給をせずにお互いを訪問する「ビザなし交流」が始まった。北方四島交流センター(ニ・ホ・ロ)では、日本人とロシア人の交流の様子が20冊以上のアルバムに記録されており、自撮り棒を使って撮影を楽しむ姿や、ロシアの家庭料理が並んだ食卓を囲む人々の笑顔を見ることができた。そんな写真を目にすると、ビザなし交流は人種を超えて互いの文化を学び合う貴重な機会だと実感すると同時に、人と人との温かい繋がりが、国同士の対立によって冷たく分断されてしまうのはとても悲しいことだと思った。



ビザなし交流の様子

ロシア連邦統計局によると、北方領土には1万8403人のロシア人住んでいる。(2023年1月1日時点)戦後80年近く経った今、彼らにとってもまた、北方四島が故郷となってしまったのである。実際にこの研修に参加した他のメンバーから、「北方領土を日本が取り返すことは、ロシア人の住む場所を奪ってしまうことになりうるのではないか」という意見も出た。さらに得能さんは講話の中で「住んでいる人たちに罪はない。」とはっきりおっしゃっており、「日本人とロシア人で一緒に作り上げた、世界に誇れる島にすることがきっとできる。」という思いを胸に、再び島の土を踏める日を待っているのだ。

ビザなし交流を通してロシア人と触れ合った人々は、ロシア人が「敵」ではないことを知っている。ロシアによるウクライナ侵攻などの影響を受けて交流実施の見送りが続いている現在、私たちが向かうべきはロシア人を島から追い出す未来なのか、問題の本質を見極める必要がある。

どちらが北海道で撮った写真? ~北を感じるとき~



北海道での写真は、、、左!

見るべきポイントは、パネルの傾斜角度にある。太陽の南中高度は緯度によって異なるため、地域によって最適な角度も変わってくる。発電効率を上げるには、北になるほど設置角度の傾斜を高く調整する必要があり、最適傾斜角度は宮崎で30度、北海道で43度と言われている、同じ日本国内でも、南北で約13度も差がある。

学校の授業で得た知識を目で見て確かめることができたのは、実際に北海道に行かなければできない体験だった。

<グルメ of Hokkaido!!>



明郷伊藤☆牧場での昼食

野付半島ネイチャーセンターで食べたホタテバーガーは、今回の研修で忘れられない味のひとつである。ホタテの春巻きが四角いパンズで挟まれていて、500ml ジョッキの別海牛乳が付いてくる。普段牛乳を飲まない私は少し飲むのをためらったが、一口飲んでその喉ごしの良さと後味のさわやかさに驚いた。

4日間すべての食事が本当に美味しくて、それをもう一度食べるだけでもまた北海道に来る価値があると思った。

研修を通して貴重な講話を聞き、同世代の多様な考え方に触れることで、何度も自分の考え方が変化していった。そしてそれは自分自身を見つめる機会にもなった。私が学んだのは領土問題についてだけでなく、違う意見を持つ人や、考えが変化していく自分自身を受け入れることの大切さである。

同じ夢を持つ仲間に出会えたり、学校や学年の垣根を越えて親しく話せる友達が増えてきたりと、この研修は私の高校生活における重要な思い出の一つになった。

研修を終え、情報発信者になった一人として強く訴えたい。北方領土問題は元島民だけでなく、日本の、私の、そしてあなたの抱える問題なのだ。

研修を終えて

「北方領土問題を自分事として考えられるようになってほしい。」それが今回の私の研修目標だった。北海道での四日間を終えて、人生が変わったかといえ、大きな変化があったかといえ、それほどではない。しかし、ネットでは北方領土というワードが目にとまるようになった。北方四島で起こった実話を基にした映画を自分から観始めようになった。こういう自分事としての些細な変化が、自分事として捉える第一歩になったのではないかと私は思う。